

祖父の人生

03K062 渋谷葉月

私の祖父、渋谷巳三朗は、昭和4年8月28日、父潤蔵・母文の二男として生まれた。その頃、祖父の父は県農会の技師（今の営農指導員）として、三島郡脇野町（現三島町）に奉職し、職員住宅を住まいとしていた。祖父の祖父（金蔵）が昭和5年7月に死去し、家督相続の為に昭和7年頃に、新発田市上三光にある家へ帰った。祖父によると、その頃の事は全く記憶にないらしいが、5歳頃、近所の子供と遊んでいた時に、蛙が池に飛び込むのを見て、「あ、蛙がいた」と祖父が言ったら、一緒に遊んでいた子供が「蛙だと？ あれはゲックだがなあ」と言わされたらしいのだという。その出来事は、今でも鮮明に覚えていると言う。おそらく、方言だと思われる。

昭和11年4月川東村尋常高等小学校竹俣部（現新発田市立竹俣小学校）に入学。同級生は42名と当時としては少ない方で、上の学級も下の学級も60名以上の教室一杯のすし詰め状態だったと言う。真新しいランドセルを背負って入学した子供はクラスでも2～3人位で、祖父は祖父の兄のお下がり（7年前の物）で、多くの生徒は布製の背負い鞄や、風呂敷に包み扱いで来るものと、様々であった。制服はなく、女の子は着物、男の子でも着物の子が多くいた。

昭和11年当時は、豪雪で、4月に入ってから部落総出で道路の雪割りをし、どうにか自転車が通れる様にした（当時は個人で自動車を持つ者はなかった）。

修学旅行は、下級生は近くの山登りや神社参拝、6年生は新潟への社会見学で、これが唯一の楽しみだったと言う。加治の要塞山に登った時は、山頂に戦国時代の山城として当時の焼き米があると言うので、探すのに生徒は皆興味を示したそうだ。米倉の臼が森は手頃な山として選ばれた。低い山にしては傾斜がきつく難儀はしたが、頂上からの展望は素晴らしいと言った。

6年生の新潟旅行は一日がかりの大旅行で、生徒全員の殆どが汽車に乗るのは初めての子供ばかりだった様に思ったそうだ。バスで新発田駅に集まり、汽車は新津経由（当時白新線はまだ出来ていなかった）で、亀田から沼垂操作場付近は線路が大きく弧を描いているので、皆面白がって石炭の煤煙など物ともせず、窓を全開にして「あっ汽車が曲がった、曲がった」と大はしゃぎだったことを祖父は記憶している。生徒一行のお目当ては小林百貨店（現在の三越）のエレベーターに乗って、屋上でお弁当のお握りを頬張る事だった。見るもの全てが初めてで賑やかな都会の雰囲気に驚かされたそうだ。

祖父が語った子供の頃の遊びは、戦争中でもあったことから、一番華々しい遊びは兵隊ごっこ（戦争ごっこ）であった。

部落の子供たちが二手に分かれてガキ大将の統率の元両軍が対峙し、野や山を駆け巡り、お互いに切り合い、入り乱れての合戦となった。刀は手頃の雑木を切って削り、手作りの刀をめ

いめい持つて戦うのだが、早く刀に切られたら負けとなり戦死者として戦列から脱落、最後に敵の大将を大勢で囲んで打ち取れば勝ち組となる。部下の雑兵役は走り回るだけでもクタクタになり、夕飯を食べて箸を置けば眠ってしまう程で勉強どころの話ではなかったそうだ。

神社は子供たちにとって格好の遊び場であった。境内の隅にみんな集まっての「おしくらまんじゅう」は、寒いときの暖をとるには最高で、熱氣あふれんばかりだったと言う。

魚捕りによく三光川へ出かけたと祖父は言う。昔は魚も沢山いて、6月頃から鱒が遡上して来て大物が捕れた話を聞くと、ジッとして居られなくなり、水鏡とやす（魚を突く道具）を持って2～3人で川へ急いだが、大物にはなかなかありつけなかったそうだ。鰐が主でたまに岩魚が捕れれば大喜びだった。お盆過ぎになると虻が大発生してとても魚捕りどころではなく、裸では行かれないようになり、釣りに切り替えて捕る子供が多かったと言う。

昭和17年4月県立新発田中学校（現新発田高校）に入学。前年（昭和16年）12月大東亜戦争（第二次世界大戦）が勃発し、戦争一色の戦時教育だったと言う。軍事教練の時間には退役の陸軍中尉が教官で、銃剣術が教科に組み込まれて、徹底的にしごかれたと言う。当時の思い出は、勉強した事よりも、下級生は援農部隊となり、真夏の炎天下広い田園で除草機押し（除草作業）の仕事で汗だくでクタクタに疲れたことだと言う。

昭和19年、祖父が3年生になると戦争がますます苛烈となり、予科連（少年航空兵）へ7つボタンに憧れて殆どの生徒が応募し、15～16才の若さで戦争に駆り出された。当時は、誰しも日本が必ず勝つ事を信じて、御國の為に一身を捧げる覚悟で、純粋な気持ちであったと言う。祖父は近視の為、不合格で戦争には行っていないが、新発田市内にある日曹新発田工場に学徒動員として配属され、徴用されて来た朝鮮人（韓国人？）と一緒に貨車から鉄の原料（砂鉄）をトロッコに積み込んで、溶鉱炉までレールの上を手押して運ぶ重労働だったと言う。とても勉強出来る環境では無かったそうだ。

ここで、祖父の人生に大きな影響を与えた人物を紹介したいと思う。祖父の名前は渋谷巳三朗、つまり三番目の子供として生まれていた。上に姉、そして渋谷第二という歳の離れた兄がいたのだった。

祖父の家の一室に、青年の写真が飾られており、私は母にこの人は誰なのか尋ねたら、祖父の兄だと初めて聞いた。また、家の庭には蔵があり、私がしまってあった古い本棚を漁っていたら、プラトン全集という、古くて難しそうな書物を見つけた事があった。その時は祖父の本だろうと思っていたのだが、やはり後で彼の物だと分かった。

祖父の兄は、新潟師範学校卒業後、古志郡での教員生活を経て、昭和18年舞鶴海兵団に入団し、巡洋艦「名取」の乗員としてフィリピン沖レイテ海戦に参加した。激戦で、昭和19年8月19日アメリカ側の集中砲火を浴び、艦と運命を共にし、太平洋の奥深くに沈んだ。日本の勝利を信じて、当時22歳の若い命を捧げたのだった。

今まで知らなかった話を初めて聞いた高校の時、私は目眩を覚えた気がした。歴史にもしもを語るのは無意味だが、もし祖父が近眼でなかったら？、もしあ兄さんが参戦しなかったら？、参戦しても、無事に生還したら？、どの仮定でも成り立ったとしたら、祖父の孫である私は生まれていなかっただろう。何故ならば、若くして亡くなられたお兄さんの、長男としての人生を祖父が歩む事になったからだ。ここに、戦争の恐ろしさを痛感する。夢も未来も、もしかし

たら恋人もいたかもしれないお兄さんの一生、祖父の次男としての、今とは予想もつかない人生。戦争で亡くなった人、生き延びた人の一生を、戦争は永遠に変えてしまう。そして、孫の私は自分が此処にいる事の不可思議さ、儚さを感じている。

祖父の敗戦は、長い夜勤がたたって下痢の為自宅で休んでいた時だった。ラジオで玉音放送があつて知ったそうだが、天皇陛下の音声が聴き取りにくくて何があったかわからぬうちに、夕方祖父の父が帰って来て日本は負けたのだと教えてもらった時は、この先日本はどうなるのだろうと、漠然とした不安が過ったと言う。

敗戦後は全てが正反対の事ばかり（教育のみならず）で、すぐには学業に戻れなかつたと言う。冬の間の暖房を確保する為に、ストーブで燃やす薪は生徒の労力奉仕で菅谷の山奥まで薪取りに通つた事もあったそうだ。当時は早く軍隊に入る様に4年で卒業出来る特典があつたので、卒業証書が早く貰えるようであれば（勉強はしたくないのが祖父の本心）、4年で卒業した。殆ど勉強出来ないまま早々に卒業したのだから学力は推して知るべきだろうと祖父は語っている。

卒業して2年間は何もする事もなく、家の農業の手伝いをしたと言う。家では祖父の叔父（現ブラジル在住）が農業をやっておられたので、その手伝いとして、牛を使って田起こし、代かき、田植え、除草、稻刈りと一通りの仕事を教えて貰つたそうだ。祖父の父が乳牛一頭を購入してくれ、その管理と搾乳を任されて、乳代が唯一の小遣い稼ぎだったそうで、張り合いがあつたと言う。冬期間、産休の先生の代用教員なども経験し、昭和23年お盆頃、祖父の父から（当時川東村助役）農業会が解散し古参の方が大勢退職する事になつたので、農協に入つてみる氣はあるかと話があり、農業だけでは生活が大変だらうし、兼業農家として現金収入があれば、それと家から通える仕事なら、と就職したと言う。

それが祖父の一生の仕事となり、昭和60年3月までの36年7ヶ月勤務し、56才で退職するまで、殆どの部門に籍を置いて無事円満に退職することが出来たと言う。

昭和23年9月農協へ就職した祖父の初任給は臨時雇いとして日給50円であったと言う。農協までの距離が4キロもあり、当時の新しい自転車は高額な8,000円で、祖父には手が出せなかつたが、祖父の父が村の助役をしていたお陰で、全額出して頂いた事は幸せな事であったと言う。

最初の職場は、米係として米代金の清算、口座振込書の作成、米の集荷、米検査日に合わせ現場に出向いて入庫証の発行、等の仕事であったそうだ。

祖父によると、当時の課長は大変独特な人で、仲人役として抜群の能力があり、年間50組位の結婚をまとめて感謝される方だったそうだ。内部の事一切を取り仕切つた補佐は、祖父が勤めてから2年目位に結核で死亡され、祖父が23歳頃、仕事の都合上、事務処理は祖父が取り仕切る事になり、若くして責任ある立場を任せられたと言う。

当時は終戦後の混乱期、食糧事情が極端に悪く米の増産は国家的な命題であったと言う。農家に対する米の供出制度は厳しく、米の出荷割当を達成しない農家には強権発動と称して農家の倉庫や作業場などの家搜しをし、罰則も同様だったそうだ。その反面、供出割当を達成し、超過供出して政府に売り渡した場合は、買入価格の3倍の値段で買い取る破格の措置が取られるなど、農家は米の供出割當に神経を尖らせたそうだ（これは闇米防止の側面もあったとか）。

端界期（9月新米が取れるまで政府の在庫米が極端に不足する時期）には早場米奨励金と称して、早く出荷すれば早い程、奨励金が高まる制度で、農家も早生品種を多く作付けして早期出荷した方が得策であった。出荷された米は、すぐに新発田駅から貨車で首都圏に送られて、政府の需給事情に貢献した事が今昔の思いであると言う。

早場米を受け入れる農協も大変だったと言う。例えば早場米の第一期（9月30日）の締め切り日は、夜の12時までは該当するので、夕方から米を玄米に調製する作業を行い、極限まで米俵に入れて、時間までに馬車で搬入する農家も現れ、農協の米係は夜通しで対応したそうだ。第二期、第三期、第四期も同様だったと言う。受け入れる米倉庫も戦前からの木造で狭い倉庫が大半で、米の出荷日にはすぐ収容力を超過して満庫状態になり、農家の土蔵を借りたり、一時集会場の広間に預かって、寝ずの番として米の上に寝泊まりする事もあったそうだ。

結婚した頃（25歳頃）から米の受け入れと農家の精算事務などへと仕事の分野が広がった。倉庫の受け入れは計画的に日程を定め倉庫に収容出来るように、米の輸送や配車計画も仕事の一部で、米を精米し消費地へ届ける為の精米施設を造り夜通しで、工場を稼働し消費地へ送り届ける任務も重要な仕事であった。冬期間の仕事が主だったので農家の現金収入にも役立ったそうだが、職場の人間関係に手を焼く事もしばしばであったと言う。

30歳を越えて営農指導部へ配属替えになった。そこで仕事は購買品（肥料、農薬、生産資材）のうちで斡旋するもの、例えば子豚、離、など農家の必要とする生き物、稻や野菜の苗物、果樹の苗木など、当時は自然乾燥の為、架木材料の長木杭や竹なども多く扱ったそうだ。

稲作指導の技術者が二人共、定年退職されて祖父は三十二歳で営農指導課長を拝命した。しかし技術を伴わない自分で良いのかと、祖父は苦悩したそうだが、人材不足で後継を自前で養成する他ないと農業高校卒の若者に勉強して貰って体制を整えることが出来たと言う。

時代は機械化の波に乗りその普及に伴って農業生産の技術も大きく変化して来た。従来の育苗から、田植え機械の導入によってそれに伴う育苗技術や、トラクターの普及によって圃場整備の必要性に迫られ、ブルドーザー整備の推進や資金の斡旋などをこなし、山間地の農家からの利用が多かったと言う。

その頃は増産のみで、一粒でも多くの米を増産する事が目標だったと言う。それを達成したのも束の間、昭和41年7月17日の大水害によって加治川が氾濫し、下高関地内の堤防（農協より一キロ位の所）が破堤して、押し寄せた水は事務所も米倉庫も水びたしにし、農地は流出して大損害を被った。その後復旧作業のために祖父は毎日現場に駆け付けて、土木作業でクタクタになったりもしたと言う。翌年8月25日に復旧工事が完了し、今後余程の事がない限り大丈夫と、小学校で盛大な祝賀会が開催された僅かその3日後に八・二八水害に見舞われ、前にも増して同じ下高関地内ともう1カ所下岡田地内が破堤し、その他山添の中小河川も氾濫して甚大な被害を受けた。政府は災害救助法に基づき、激甚災害地に指定し天災資金や自作農維持資金などを適用して被災農家の救済に当たった。農協もその資金の窓口として対応に追われた。そんな中幹部職員が定年退職したために金融課長を38歳で任せられ、資金貸し付けに没頭した。

昭和40年代は農家の経営も安定したので、生活改善に合わせて新築ブームが起こり、住宅資金の需要が高まり、連日建築業者からの見積もりを徴して融資の相談に預かったと言う。大晦日には商店や取引業者の資金回収を行って目標額の上積みを計り紅白歌合戦は殆ど見る事も出来なかつたそうだ。そんな折管理課長も兼務する事になり、老朽化した事務所改築の計画を立て、組合員から増資承認を取り付ける迄増資反対者の説得には苦労したが、今は立派な農協会

館が出来て広く諸会合にも利用されよい記念事業だったと祖父は思っている。

同じ地位に長くいることは内部牽制上好ましくないということで、今度は購買課長に移動したと言う。当時購買品（肥料、農薬など）の売り上げ代金の精算は全て手書き処理のため、間違いも多く苦情もあり、経済連の電算センターに業務委託を行って実施して以後、あまり間違いの声はなくなり、一方で業務改善した分外務活動に向ける態勢が出来たと言う。石油類の販売も非常に取り扱いが少なかったので、時代に合わせてスタンド建設に踏み切り、石油類の飛躍的増加をもたらす事が出来たと言う。丁度その頃は石油危機の最中で、スタンドが出来ても新規へのガソリンの割当が少なく、出光系列の市内大手の川崎石油より分けて貰うなど急場を凌いだ事もあったと言う。マイカーの普及に合わせて農業機械の整備部門の強化と自動車警備工場の建設を役員会に提案し、この部門の農協取り扱いの拡大を目指して取り組んだ。幸い市農政課の協力を得て県の補助事業の認定を受け立派な施設が出来上がった。この施設を中心に組合員に密着した購買部門の拡充に寄与したと自負するものであると、祖父は言う。購買部門が落ち着いたところで再び管理・金融統括部門の責任者となり、定年を迎える迄その席に留まった。主たる仕事は、土地ブームにより宅地開発や住宅建設などであったため、農協もこの分野での組合員の財産管理に役割を果たすべきだとのが上がり、宅建主任者の資格を職員のうちから取得する様にとの事でまず課長からとの声に押されて挑戦した。祖父が言うに、すでに記憶力も劣り、難関突破には自信がなかったそうだが、農高を優秀な成績で卒業した若い者に負けては立場上困ると言う事で、特訓を受け、夜仕事から帰って法規を齧りながら必死で勉強し、受かった時の達成感は今でも忘れられないそうだ。そんな事から最初に取り組んだのが、新しい仕事が次から次へと拡がって来たのに一向に直っていなかった規定・規約の全面的な改正に手を付けることであった。整合性を考えながら、まとめる事が出来たと言う。

最後に農家の過剰な機械投資の借財や畜産農家の失敗などの負債整理に不本意ながら取り組まざるを得なかった。負債整理の為農地を手放す農家が出ると、責任の一端は農協にもあるのではと複雑な気持ちだったと言う。

役員会には、議案説明や意見を具申し、議事録の書記として、記録の整理、保管、諸会議の案内文書の起案、会議の運営など庶務的な仕事を主たる業務としてきた。また、最古参の職員として、各課の連絡協調を計り事業計画の作成、財務諸表の作成等、事務・業務全体を統括し、役員の指導に基づき事業の進捗状況の把握に務め、経営分析や内部、外部監査資料の作成等職員の先頭に立って円滑な運営がなされる様に努力したつもりだと言う。

また、金庫室の鍵を13年間お預かりして業務開始前に必ず解錠する責任が祖父にはあった。多くの宴会でも自分を失う事のない様に心掛けて来たが、人間やはり弱いものでなかなか守れない事もあり常に反省しながら毎日を大切に務めて来たつもりだが、退職して果たしてどんな評価を下されていたのかは祖父は自信がもてないと思っているようだ。因に祖父は、酒には目がない人である。

しかし、祖父は、自分の農協での仕事は常に日の当たる部署ではなかったかと思っている。色々と農協の体制整備に関わって来た事は巡り合わせとは言え、農協勤務は幸せであったと祖父は感謝している。

あの頃（昭和60年退職）は、右肩上がりの高度成長期で何をやっても余程の事がない限りやって来られた時代、今の職員は不況のドン底で大変な苦労を重ねている現状である。1日も早い景気の回復と明るい農業の展望が開かれる事を祈っている。以上は祖父談。

祖父は退職後、二王子神社屋根改修工事完成まで事務局長（会計担当）として3年間務める。神明社改修工事を氏子総代として務める。これ迄に3回の改修が行われた。宝積寺の改修工事に護持会（檀徒総代）副会長として会計を担当。竹俣小学校後援会副会長を6年、以後顧問として今に至る。学校改築工事には促進実行委員会総務部長として携わった。上三光避地保育所長として4年在任。地区民生児童委員として5期、15年担当し、今年定年で退任の予定。現在川東地区民生児童委員協議会長として6年目。国民年金委員として5～6年担当。集落区長に2回選ばれ、最初は川東地区区長会長兼務、次に区長会会計担当。大平山山業総代を3年間。山に関わる昔からの行事について取り扱う。ニノックススキー場建設に伴う、自然破壊などの公害被害対策として地元対策協議会長を六年担当。業者と折衝。農協退職者の組織、農林年金受給者連盟川東地区会長として8年間、現在も続いている。年金友の会連盟の副会長として8年間、現在に至る。三光地区の耕地は傾斜地、未整理地を集落の世紀の大事業として30アール区画の基盤を整備して農作業が飛躍的に向上した。その換地委員として不公平の少ない様出来上がった農地の配分に寄与した。

その他、色々の役職を祖父はこなしていた模様。祖父は機械類が苦手で、私によく文書作成のバイトを依頼していたが、当時私は、神明社改修工事に伴うご寄付のご依頼、などと打ち込みながら、祖父は一体何の仕事をしているのだろうかと疑問に思っていた。今やっと、その理由がわかった。

戦後の結婚ブームはベビーブームを生み、所謂団塊の世代が誕生した。

祖父の場合は、23歳で結婚適齢期を迎えた（今と異なり、当時は早かった）。祖父の父は、紫雲寺町藤塚浜の魚売りの「岩野」と言う方に適當な方を世話してくれないかと頼んだと言う。条件は、祖父の背が低いので背の高い方が望ましいと言う事で一任したそうだ。そこで駅前の長島旅館（祖母の兄が経営している所で、今は食堂）で見合いをする事になった。相手の女性は当時19歳、すらりとした長身で、丸顔は祖父の好みでもあったそうだ。それが祖母和子（旧姓中野）との初めての出会いとなった。すぐ申し分のない方、と同意し即座に結婚を申し込み、2～3回祖母のお宅へ行った程度で11月28日仲人様を立て結婚した。

結婚式は三日三晩延々と祝宴が続けられ、延べ100人以上の方を招待し盛大に挙行されたと、祖父は記憶している。

長女誕生・昭和31年5月生まれ、初孫として可愛がられた。ブラジルへ渡った叔父も良く面倒を見てくれた1人だそうだ。几帳面で責任感も強く、何処へ出しても恥ずかしくない娘に育ってくれて何も心配はなかった。よく不遇に耐え、2人の子供をここまで立派に育てた事は我が子ながら敬服に値する、と祖父は語っている。因に私の母です。

長男誕生・昭和34年2月生まれ、長男は農家の跡取りが当時は宿命づけられており、祖父の父は特に可愛がって、そつとチョコレート等を与えて少し肥満気味だったとか。家業の関係で農業高校が良いだろうという事で、親元を離れて巻町の県立興農館高校に入学。3年間全寮制で団体生活に揉まれて来たが、少しは身の為になっていることだろうと祖父は思っている。後に結婚、一女一男をもうける。

次男誕生・昭和37年6月生まれ、末っ子で甘えん坊だがそんなに甘える訳でもなく1人コツコツとプラモデルなどをを作る事が好きだった。あまり勉強している様に見えなかつたが、いつ

も成績はトップクラス、新発田高校受験の際は失敗した、と一晩中布団をかぶって悲観していたそうだが、ちゃんと合格し、入学していた。新潟大学にも現役合格し、親に余計な負担を掛けずに社会に巣立っていったと祖父は語っている。今は、生活の基盤を固め、家庭を持って貰いたいのが祖父母の念願である。

昭和46年5月、祖父の母親が肝臓ガンで死去、数え歳で70歳だった。その2年前より体調を崩し、県立病院の入退院を繰り返していた。ノーノーと言う事のなく、いつもニコニコとし、気持ちの平らな人だったそうだ。祖父としてはもう少し長生きして欲しかったそうで、残念に思っている。

昭和58年10月、祖父の父親が他界。祖父の母親より7つ年上で、彼女の死後13年1人生き抜いたので、数えで90歳の長命であった。戦前からの村の指導者で、昭和38年70歳で新発田市議会議員に当選、一生涯村の発展に努力したと言っても過言でない人だった。祖父は、自分の父親の長命も祖母の懸命の介護のお陰だと語っている。祖母は子育てが終わってから「舅」の世話をしながら休む暇のない忙しさの農作業によく耐えてくれたと言う。

1～2ヘクタールの稲作りは昭和40年代までは殆ど機械力に頼らぬ手作業の為、しかも兼業農家で、1人でその苦労を背負って来た。長年の無理がたたって足腰を痛め、左右の膝は水が溜まって3回も手術し、以後50歳から無理の利かない身体にしてしまったのは、自分の責任だと祖父は痛感している。その「償い」は充分出来ないけれども、せめて余生は安楽に過ごして貰いたいと祖父は願っている。

私は祖父に、自分の人生を振り返ってどう思ったかを聞いてみた。すると、「よき伴侶に恵まれた人生だ。私の選択は間違いかなかった、と自負している」との答えが返って来た。同席していた祖母も同じ答えだった。

去年で結婚50年目、金婚の祝いとして、祖父母とその家族全員で温泉旅行をした。これからも、2人には変わらずにいて欲しいと思う。

私は、祖父の一生を一通り知って、1人の人間の、人生の重みというものを少し理解出来た様な気がする。一応知っていたつもりだったが、今回のレポートを作成する事で実感出来た。どんな人間にも人生があり、それらは等しく価値のあるものだと。

そして、私も戦争を越えて受け継がれたこの命を大切にし、自分の人生を生きたいと思った。

(レポート指導教員 神田より子)